

十八世紀のカルティエ・ラタンと

哲学者エルヴェシウスの学生時代〈下の二〉

——評伝 エルヴェシウス家の人々〈その十〉——

永治日出雄

第五節 コレージュ・ルイ・ルグランの教育と

哲学者エルヴェシウスの学生時代（その四）

——学園の規律と生徒への賞罰——

（一）

イエズス会がコレージュと大学を備えたのは、そこにおいて会士が衆人への支援に役立つ知識と要理を正しく修得するためであり、かつまた際立って重要な願望、確乎たる宗教的徳操への願望とともに、みずから修得した事柄を隣人に伝えるためであるから、学園設立の目的をひたすら達成するよう、校長は努力すべきである。⁽¹⁾

一五九九年に制定され、全管区に通達されたイエスズ会『学事規範』には、校長の使命としてこのような教育理念の貫徹が明示されている。コレージュ・ルイ・ルグランにおける教育の根幹が、カトリック的な道徳性と信仰心の涵養であったことは言うまでもない。文法学校や修辭学級で卓越した講義を行う教官たちも、生徒の性格と品性を醇化することこそ、もっとも高貴な責務と信じていた。古典学者のジョバンシ神父はギリシア・ローマの著作家をキリストの先駆として教えた。また、ボレ神父の講義ではアリストファネス、テレンティウス、ラシーヌ、モリエールについて、品性を高めるか否かで作品の優劣が判断された。⁽²⁾

デュボン・フエリエの大著『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグランへ（二五六三—一九二〇）』によれば、ルイ・ルグランにおける道徳教育は生徒に対する外部の悪影響を除去するから始められた。ここではすべての教育段階で新規の入学が許され、修辭学級などでは十三歳を超えた新入生も稀ではない。卑俗な見方や習慣を彼らが学園に持ち込み、多数の生徒に感染させていく。また、早くから在籍する少年にもしばしば家族教育の弊害が認められた。⁽³⁾歴代の記録を点検しながらデュボン・フエリエはつぎのように叙述する。

多くの生徒たち、とりわけ地方のブルジョワ出身の生徒たちは最良のフランス的伝統を保持していた。こうした子弟は学校においても敬意や勤労や活力や良識を大切にした。一五八七年コレージュ・ド・クレルモン視察の際にローラン・マギオ神父が示唆したのは、この種の家系である。ボレ神父もこれを再三称讃し、キリスト者の健全な道徳が若い人々にとっていかに有益であるかを留意させた。しかし、これらとは異なる家系がとりわけ大ブルジョワジーの層にはあまりにも多数存在した。「そうした家系の父母は」とボレ神父は述べる。「品性よりも知性のために、そして知性より身体のために心を配る。彼らは子どもを幼いときから柔弱な生活に浸す。そして、優雅にお世辞を交わすこと、笑ったり、歌ったり、尋ねたり、頷くことを仕込む。」こうし

て「徳を語ること」を忘れてしまう。「多かれ少なかれ、」自分の短所を我が子の前で曝す暴挙に父親が気づくよう、ボレ神父は綴る。

道徳への門口は確乎として広大である。

入るにはなにか欠けているか。立派な範例である。

怠惰、放縦、遊興。あまりにも多くの生徒が自宅ではこれらに囲まれる。そして、父親の追従や母親の怯懦をいつも見たり、聞いたりする。父親は反面教師としての權威しか持たない。我が子の天性について配慮するどころか、それに無理強いし、捻じ曲げる。そして、自分の都合によって子どもを犠牲にし、程度の悪い多くの聖職者に平然と委ねる。⁽⁴⁾

青少年を墮落させる作用は肉親だけでなく、従僕や友達や知人によっても惹き起される。それらを放置すれば、生徒は性的な欲望や世俗的な逸樂に蝕まれ、カトリックの教義に背を向けるに至るであろう。精神の醇化を唱導するイエズスの教育方針は、家族に対する不信の念を底流とし、学園と社会の遮断を基調としていた。⁽⁵⁾外部と生徒の接点である来訪や外出がルイ・ルグランでいかに規制されたかは、やはりデュボン・フェリエの分析が詳細である。

来訪、文通、外出、休暇が家庭教育の欠陥とともに生徒を墮落させ易い。コレージュへの来訪に対処して、十六世紀の末葉または以降に面会室が設置されたが、堅固な防壁とはかならずしもならなかった。外部からの来訪者を教室や校庭に、またとりわけ個室に迎え入れることが、あまりにも頻繁に行なわれた。一七〇八年には教学監の責務として来訪者を送迎し、「丁重に挨拶する」よう定められた。来訪者が監視されたことを、この事実は暗に意味する。学園祭の日々にはきわめて富裕な生徒のアバルトマンが、人目を惹く愛らしい来客に開放されたとの証左もある。一七四九年にリュック嬢は躊躇いもなく若い親族の窓辺に現れ、浮ついた調子で

痴態を示した。母親、祖母、四十歳以上の親族を除くすべての女性に生徒の居室へ近づくことが十六世紀までは禁じられていたが、そうした古來のご法度が十八世紀には忘却されたわけである。女性が礼拝堂に入ることすら、一五七六年には禁止する動きがあった。エヴラール神父は聖木曜日の墓参を女性に許さなかった。

来客とともに文通も大いに警戒された。校長が管轄の権限を持ち、少なくとも一五八七年には校長の指揮のもとに生徒監が管理した。正式の許可なしに手紙を書く権利はなにびとも持たなかった。とはいえ、門衛の目をかすめて若干の手紙が学園の外に抜け出たとの証左もある。ルイ十五世治下のリヨンでトリニテ修道会のコレージュの学生たちが幾人かの女優に手紙を送り、返信を受け取っていた。ルイ・ルグランの生徒は彼らより従順であつたろうか。十八世紀にはサン・ジャック街で綴られる手紙が多様化し、家庭教師とともに下宿している通学生は、校長や生徒監の承認を等閑にした。〔中略〕

外出は財布に大きな負担をかけたが、とりわけ道徳的な面で多大の犠牲を招いた。駕籠、四輪馬車、辻馬車が寄宿生を大都会のあちこちに連れていく。行先は貧者の家でも説教の場でもない。十五歳にしていまだ学生であつた若きダルジャンソン侯爵は、いたく屈辱を感じてつぎのように誌した。「私たちはしばしば外出したが、観劇や逍遙や会合で品位を保ち、格好よく見せるため、自分はすべての蓄えを使い切った。」出世の糸口となる社交界の婦人の関心を惹くことに、ダンジャンソンはきわめて早熟であつた。フランソワ・アルエ〔ヴォルテール〕について言えば、修辞学級の生徒の分際でニノン・ド・ランクロに讃辞を捧げに行った。実際には彼の後見人が取えてそこへ案内したのである。しかし、外観のよい若者を探す女たちがコレージュの周辺をしきりに歩き回ったとは確言できない。彼女らについて証言を求められたルイ・ルグランの卒業生、ド・ビュリ氏はそうした事柄を実際にも語っていない。

他方大抵の生徒は外出の許可を得られなかった。彼らには窓越しに外部の世界を眺めることも禁じられた。

より幸運な学友を乗せた四輪馬車の響きや、サン・ジャック街に充滿する馬や車輪や従僕の騒音を、せいぜい休日に聴くだけであつた。⁽⁶⁾

こうした風紀の取締りは学園生活の全体に及び、校長以下すべてのスタッフが生徒の徳育に係りを持った。青少年の模範としての教官にも敬虔で清澄な生き方が求められたことは勿論である。正規のさまざまな授業において道德教育と宗教教育が進められる一方、寄宿生に対してはイエスズ会を特色づける軍隊式の指導と監督が実施される。居室における言動まで彼らは監視され、たえず生徒監や教官から忠告や訓戒を受けた。⁽⁷⁾こうしたルイ・ルグランの指導体制について、デュボン・フェリエはつぎのように概括する。

生徒の道德的意識に影響を与えるのは、特定の教官だけではない。コレージュにおいて要職を占め、もっとも重要な管理機能を担う人たちは、生徒への道德的影響が思わしくない場合、遲滞なく更迭された。こうした幹部のもとに教官、生徒監、助手が勤務する。彼らの任務は比較的地味で抑制されていたが、より狭い配意で決定的な影響を及ぼした。教官は一名二名の生徒を、生徒監は十二名、十五名、または二十名を担当した。彼らは生徒と生活を共にし、勉勵の監督と指導に努めた。起床から就寝に至るまで生徒との接触は、どうやら授業の間は別であつたとしても、けつして絶えない。夜間も眠っているか否かが監視された。たえず同席して見張るこれらの教官層には、些細な想念、些細な企て、些細な行爲を隠すことも容易でなかった。彼らは多くの者には聡明な指導者であり、若干の者には親密な年長の友であり、なにびとも無視できぬ存在であつた。生徒数二千ないし三千のコレージュで、五百人から千人の寄宿生のうちひとりとして完全に放置されなかつたのは、なによりもこうした教官層のお陰である。⁽⁸⁾

一七世紀中葉のルイ・ルグランに勤務する教官と助手は各々二十名強であったが、一八世紀には倍加し、これに生徒監を加えたフタツフ約百名が小型の軍隊を形成した。とはいえ、校庭や居室における生徒の一挙一動をすべて把握することは彼らもできない。せいぜい禁止できたのは、好ましくない遊戲、侮辱的な行為、刺激的な言葉、節度を越えた諍い、他人の居室への侵入などとされる。嫉の悪い子どもや退廃的になった若者が学園に荒廃を持ち込むこともある。通学生生数は寄宿生の数倍に及び、危険な動きを取り押さえたり、防止するのは困難なのである。⁽⁵⁾ラセルヴィテールによる評伝『シャルル・ボレ神父』には、この卓越したイエズス会士が精神形成の要因として教官の指導・監督とともに生徒間の交遊や会話をいかに重視したかを述べている。

ルイ・ルグランの多くの寄宿生は数年間家族から分離され、その年頃でもっとも必要な家庭の配慮や父母からの愛情に欠けていた。それは苛酷な孤立であつて、コレージュでの友情だけがある程度辛さを和らげた。ヴォルテールの書翰を読めば、蜚雪の時代にさまざまな階層の若者の間でいかに強固で親密な友情が結ばれたかが判る。しかし、墮落した子弟ときには監視を潜り抜けて寄宿生のなか入り込み、彼らとのつきあいが純真な生徒には真に危険なものとなる。そのような子弟について執筆された『ボレ神父の』小品『友人の選択』(De Amicorum delectu) は、いまでも色褪せぬ迫真の描写を含み、経験豊かな指導者のみがなした著作である。コレージュという新しい環境に入った子弟もは、自分を取り巻く未知の人々からなんと気軽に友人を選ぶことか。外見上の見栄え、才知や挙動の魅力、文学や芸術に関する好みの一致だけで大抵は選択が決まる。こうした無思慮な関係にいかにも危険が潜むことか、犠牲者を造り出せば、恨みを晴らしたと思ひ込む邪悪な子弟、純真な学友を墮落させるという卑しい欲望に憑かれた子弟を、この老練な教師は私たちに描写してみせる。「あたかも鳶や秃鷹のように、彼らは悪臭を放つ凄惨な死体の上にはばらく留つたあと、清純な鳩のまわりに

軽やかな軌跡を画く。ときには空中に飛翔し、戯れるかのように舞いながら、実際には無思慮な鳥を手玉に取り、最後は一気に襲いかかって純真な生きものを打ちのめす。」

人目を避け、隠れるような一群が校庭の片隅にいる。彼らの会話を聴いてほしい。悲しくも数時間で子どもが知識を身につけることも明らかになる。悪徳によって名誉心と信仰を喪失した空虚な眼つきや恥知らずな表情、これこそ学友によって墮落に導かれ、健全で繊細な情緒を麻痺させ、淫らな言動にしか興味を感じない若者の肖像である。ヴォルテールの恩師は遍く知られた力強い筆致でこのように叙述する一方、熟知する若者の心に公正な視線を注いで、悔悟の念を目覚めさせ、再三にわたり魂を救済した。⁽¹⁰⁾

反対に生徒間の善導と啓発がコレージュにおける人間形成を実り豊かにしたことは確かである。コンティ公が学寮時代の親密な友誼をいつまでも忘れなかった、とモリエールは語っている。ヴォルテールの最良の友、ダルジャンタル、シドヴィル、フョー・ド・ラマルシユはかつての学友であった。多くの子弟を託したダルジャンソン家はその社会的な影響力によってしばしばお返しをした。「高潔な心は友情の責務をけつして忘れるものではない」とボレ神父も生徒の前で教えた。⁽¹¹⁾

読書も学園生活の重要な要素とされ、悪しき書物は悪友以上に危険とみなされた。しかし、古典的な著作や楽曲もしばしば教育上好ましくない箇所を含み、書物の検閲と削除が容易には行われない。一五七五年にルイ・ルグランでは生徒に対し蔵書一覧の一斉提出を求めたが、そうした規制は徒労に終わった。彼らの机を生徒監が頻繁に点検し、異端的な書や淫らな本を捜しても無駄であった。禁止された書物が二つ折判や四つ折判であるとは限らず、小型本は通学生によって持ち込まれたり、巧みに隠される。⁽¹²⁾読書の役割についてもボレ神父が強い関心をしめした。とラセルヴィテールは評伝において説明する。

悪書に対してもボレの攻撃が激しいことは、小品『好色本の追放』によって明らかである。行動の自由な通学生はそうした書物をよく知っており、密かにコレージュの塀を越えて少なからず持ち込むらしい。〔中略〕悪しき読書は悪しき会話より一層危険である。なぜなら、話を聴くのが一過性・一時的であるのに、書物はつねに現存し、絶えざる誘惑となる。無思慮な読書によつて過度の知識を得た子どもは精神状態について、ここではきわめて精密に、また悲しくも的確に分析されている。悪事を会得するために、長期の訓練や長時間の読書はまったく要らない。書物を開くや、哀れな子どもはときには数瞬ですべてを知る。そして、禁断の果実を食べたあと、アダムとイヴが体験した事柄を子どもも体験する。「ふたりは開眼し」羞じらいを意識した。同じように子どもは読んだ内容についてまず当惑して立ち止まる。それまで想像もなかった事柄を初めて知って、彼は愕然とする。彼の魂はそうした新しい知識を受け入れ、根底から動揺する。かつて見られなかった朱色が頬を染めて、彼は羞じらいながら呟く。「早すぎたろうか、それとも遅すぎたろうか。」以前判らなかつた光景や言葉も念頭に甦る。いまや彼は考え、眺め、感じる。享樂的な情欲を駆り立てる物事がやがて目の前に現われれば、清澄で純潔な情念しか抱かなかつた子ども（聖パウロの教えのとおり、清澄な人々にはすべてが清澄である）が、いまや内面に破廉恥な反抗心を募らせる。それまで覚えなかつた反抗心が、あまりにも多くを知つたため、芽生えたわけである。恵み深き無知よ、なんと速く消え去ることか！不幸なる知識よ、なんと速く根をおろすことか！⁽¹³⁾

(一一)

ルイ・ルグランにおける道徳的訓練の原則は、各人の本能や習性や意志を抑制し、キリスト者としての美德を涵養するところにあつた。総長に統率されるイエスズ会の組織として、この学園でも校長を頂点とする階層的秩序が築かれ、神聖な権威への服従がもつとも重要な徳目とされた。⁽¹⁴⁾ 宗教的徳操の育成を強調する『学事規範』には、生徒に対する監視と懲罰が主要な方策のひとつに定められている。

〈初等教学監規範〉

【二四二】目的

われらの学園で学ぶ人々が自由学芸についても風紀・品行についてもつねに向上するよう、ここで指導と運営に関して校長を補佐するためにみずからが指名されたことを、初等教学監は銘記すべきである。

【二四三】統括教学監への従属

コレージュにおいて初等教学監は、道徳的訓練に関しては直接校長から、勉学に関しては統括教学監から裁断を受けるべきである。これら上司の指示から逸脱してはならない。また、既存の慣習を無視したり、新たな対処を導入してはならない。

【二八七】監察係または取締係

初等教学監は各地の慣習に応じてそれぞれの学級に公認の監察係を置く。監察係という名称が適切でなければ、隊長か取締係と名づけてもよい。同級生から尊重されるよう、彼らに名誉ある特権を付与すべきであろう。教官の諒承のもとで同級生に軽い刑罰を課する権限が監察係に授けられる。同級生のだれかが終了の鐘以前に

校庭に飛び出したり、ほかの学級へ侵入したり、自身の教室や座席から離れないよう、監察係が見張りをする。また、欠けている者はないか、生徒以外の者が入っていないか、教官がいてもいなくてもだれかが過失を犯していないかを、初等教学監は毎日彼らに報告させる。

【二八八】矯正

勉学の達成または品性の向上に関して逸脱するところがあり、たんなる忠告や訓戒では正されぬ生徒のために、イエズ会士とは別個の矯正官を設定してもよい。そうした矯正官のいない学園では、スコラ生徒の対処に倣うか、他の適切な仕方では懲罰の方法を確立することになろう。ただし、稀有な事例として重大な問題に関してのみ、生徒の過ちを教室で罰することが許される。

【二八九】矯正の拒否

笞刑を拒否する生徒については、危害の生じない範囲で身体を拘束してもよい。たとえば生徒があまりに年長で、この方法が適切でない場合、校長の諒承を得たうえ、彼の受講を禁止することができる。

【二九〇】生徒の放校

訓戒の言葉によっても矯正官の努力によっても生徒の悔悟が期待できず、学友への危険が憂慮される際には、みずからの進歩もなく、他者を害するだけであるから、学級に留めるよりも隔離するほうが得策である。ただし、神の栄光と神への奉仕にすべてが寄与するよう、こうした事例の処理は校長の判断に委ねるべきである。⁽¹⁵⁾

一九世紀の社会学者デュルケームはフランス教育史におけるイエズ会士の役割を高く評価しながら、彼らの独創性をなによりも道徳的訓練のなかに認めている。彼の考察によれば、『学事規範』に明記された監督および矯正は生徒と教官の緊密な関係を前提としている。愛情をもつてたえず生徒に接し、各人の個性や性格を認識することが、校

長、教官、生徒監の責務なのである。⁽¹⁶⁾しかし、上記の『学事規範』でとくに注目すべきは学園管理の一環として生徒間の監視と懲罰が指示されたことである。そうしたイエスズ会の教育方針がサン・ジャック街でいかに制度化されたかを、デュボン・フエリエはつぎのように叙述する。

教官の監視を補佐したのは、ほかならぬ生徒自身であった。そうした生徒に選ばれたのは、悪口や中傷や無礼な言葉を模範的な態度、友情に充ちた忠告、臨機応変の注意書きで遮断できる選良イエスズ会士ではむしろなかった。当該の任務のため特別に指名され、正式に権限を授けられた生徒がいたのである。隊長と取締係だけでは足りなかった。見張りを倍加するために歩哨あるいは番人と呼ばれる生徒を定め、お喋りや怠け者や居眠り、さらには禁書を犯す者や秩序を乱す者を校長に訴えるよう命じた。教室、礼拝堂、休憩の場、到るところにこうした歩哨が配置される。小さな教室ではだれだか判り、大きな教室ではどこにいるか判らなかつた。〔中略〕一五八七年と十七世紀末葉にルイ・ルグランで、また一五九九年にはイエスズ会のすべてのコレージュに勧告されたこの制度は、十六世紀から現在に至るわれらの校風において非凡な変革の試みをなした。思慮ある生徒に学友の監視を委ねるというルイ・ルグランの慣習に沿って、一七三〇年ベルニがその辛い任務を委ねられる。「聡明な生徒という評価を得た私は、」と彼は述べる。「休日に許可なく学校から離れたり、市中を歩きまわる生徒を見張るよう命じられた。この任務はしばしば私を多大の心痛と不安に導いたが、学友の希望を失うことなく、先生方も満足されるように遂行できた。」

こうした自身の取締りができない生徒は、あたかも百眼巨人に囲まれるように、教官や学友に取り巻かれて暮らした。彼らのすべての行為、彼らのほとんどの想念が審問を免れえなかつた。⁽¹⁷⁾

生徒自身による監視と懲罰が学友同士を離反させ、教官への通報と密告が学園の雰囲気陰湿なものにしたことは

容易に推察できる。しかし、一九世紀末に刊行されたコンペイレの名著『フランスにおける教育理論の批判的歴史』では、伝統的な教育との対比のなかで、監視や懲罰に関するイエズス会の方針が優れて節度あるものと称讃されている。そこでは規律違反に関して十分な事実確認と慎重で冷静な対応が求められ、生徒の反省や改心を引き出すことに重点が置かれた。⁽¹⁸⁾ルイ・ルグランの学生でも教官でもあったデュボン＝フェリエの記述はやや弁明的にも感じられるが、こうしたコンペイレの評価とは合致する。

生徒への教導が挫折した場合、止むを得ず懲罰に訴えるはかなかった。警告的な訓練を抑圧的な訓練に代えるわけである。その際にも節度が保たれた。不用意な処罰は極力回避された。誤った処置でないことが、咎打つまゝに二度確認された。過度の懲罰は生徒を永久に傷つけるかもしれない。被疑者の自白を引き出せばよいのである。罰するにあたって、怒りに駆られたり、見せしめにしたたり、權威を誇示することは自制された。また、生徒の家名や故郷や身体的な欠陥について侮辱的な言辭を発することも禁じられた。空虚な脅迫も生徒への詰問も慎まれる。教師の權威を損なう馴々しさも同様である。公正さこそ不可欠であった。父親の威光で息子が罰を免れるとか、特定の子どもを手加減するなど、だれにも信じさせてはならぬ。全員を処罰することも堅く戒められた。だれが悪いかを曖昧にするばかりか、ともすれば学級全体を教官に離反させ、強い反発を招くからである。極端な甘さと同様に極端な厳しさは危険とみなされ、つねに中庸が守られた。最悪の懲罰は罪ある者を絶望させることである。最良の懲罰は罪ある者を改心させることである。道を誤った自分にいち早く注意してくれたこと、いま犯した罪を罰するのは将来罪を犯さないためであることを、生徒は自覚すべきである。公正な処分が行なわれると、懲罰が道徳的な善導に役立ち、ひとつの罪過から多くの善行が芽生えた。罰し方とともに赦し方が重要であることは付言するまでもない。破廉恥なものではなく、ほかの生徒に知られぬ罪過

は、懲罰の処分よりも寛大な措置によって一層立派に矯正できた。⁽¹⁹⁾

この学園に関する重要な文献のひとつ、G・エモン著『コレージュ・ルイ・ルグランの歴史』には生徒の懲罰のため造られた地下牢を発見した記録が言及されている。現地を検証したエモン自身はこの記録に懐疑的であるが、ルイ・ルグランにおいて現代の私たちには苛酷と感じられる処分がしばしばなされたことは確かであろう。⁽²⁰⁾ つぎに引用するデュボン・フェリエの実証的な報告にもかなり陰惨な懲罰の事例がいくつか含まれる。

とはいえ、ある種の罪過は明るみに出され、人前では正されることを必要とした。毎日小さなテーブルで食事をするよう、生徒が食堂で処罰を受ける場合もあった。あちこちで少量のパンや葡萄酒や水をほかの席から貰ったり、テーブルの脚元に口づけするのである。ただし、こうした屈辱的な扱いは異様な感じを与えるとして、一五八七年以降は禁じられた。

重い罪過の生徒を閉じこめる〈反省室〉は〈体刑室〉とも呼ばれ、彼らの良心に悔悟の念を芽生えさせるべく設けられた。〈体刑室〉の壁には生々しい絵が画かれ、不行跡の末路として大勢の怪物や悪魔に囲まれる地獄が示されていた。イエズ会士は気味悪い牢獄に何人かの生徒を埋めたと不当にも非難されているが、こうした伝説を収録したデリュールは〈反省室〉について思い違いをしたのだろうか。

それほど劇的な措置ではないが、数日間生徒を寝台に据えつけ、犯した罪過を反省させることもあった。教監を緑青によって毒殺しようと企てた不良生徒が一七五三年に摘発された。

従順でない生徒に対する笞打ちは慣習によって是認された。一五八七年以前には教師がしばしば平手打ちを行った。コレージュ巡察の際にマジオ神父は一層の忍耐を求めて言った。『なにびとも手で撲ってはならぬ』体罰を教室で行うのは稀有の例外とされた。しかし、規律への違反や目に余る怠惰には笞打ちの処罰も許され

た。手順はどうであつたか。校長の承認、矯正官の召集、罪を犯した生徒に対して、立入り禁止で懲罰を執行。十六世紀以来矯正官はイエスズ会の外部から選出され、生徒からは悪意をもつて〈裁判長〉と渾名される。寄宿生とともに通学生も彼らに委ねられ、同一の扱いを受けた。⁽²⁾

このような監視や懲罰に対して生徒の立場からさまざまな形で抵抗や抗議がなされたことも充分推察できる。同時代の重要な史料、サン＝シモン著『回想録』にはルイ・ルグランの生徒指導から発した悲惨な事件が語られている。ヴェルサイユ宮廷の傍流に置かれたサン＝シモン公爵は、絶対王政の現実には冷徹な眼を向け、イエスズ会士の独善的な教義や権力者との癒着をも痛烈な筆致で描いた。伯爵の親友であるルイ・フランソワ・ブッフレ元帥はルイ・ルグランに子弟を託したが、一七一年三月詩人ボアロー・デブレオーの逝去直後に不慮の出来事に遭遇する。

数日後ブッフレ元帥に痛々しい不幸が生じた。彼の長男は十四歳であつた。眉目秀麗で体格も良く、将来も大いに期待もできた。また、フランドル・リール総督の襲職権を授けられ、父親とともに国王に拝謁したとき、宮廷での立居振舞も感嘆すべきものであつた。そのまま彼は寄宿生であるイエスズ会コレージュに帰つた。ダルジャンソンの息子ふたりと彼がどんな過ちを犯したか、私は知らない。なにびとをも怖れず、なにびとをも斟酌しないことを誇示しようと、イエスズ会士はこの少年を笞刑に処した。実際にはブッフレ元帥を怖れる理由がなかったからである。しかし、同罪と思われる他のふたりを咎めることは自制した。信任の篤い警察長官ダルジャンソンとイエスズ会士は書物やヤンセン派について、さらには彼らに係わるあらゆる事柄や事件について毎日相談していたからである。誇りの高い少年ブッフレ、ふたりのダルジャンソンと同じ過ちしか犯していないブッフレは絶望に沈み、その日のうちに病氣となつた。將軍の屋敷に彼は運ばれたが、救うすべもない。心臓の発作が生じ、血液の循環は損なわれ、深紅色が現われる。四日間ですべてが終つた。父母の悲嘆は祭す

るに余りある。心を痛めた国王は速やかに使者を送り、縉紳の死に準じて総督襲職権を次男に授けると伝えさせた。イエスズ会士に対する一般の非難は囂々たるものとなった。⁽²²⁾

(三)

監視や懲罰よりもイエスズ会士が一層強調したのは、競争心と名誉心の喚起である。生徒の意欲を高めるため、彼らは平素の授業や学園の行事のなかにさまざまな形の称讃と表彰を用意した。競争心や名誉心も羞恥心や恐怖心と同じく人間の情念に属し、こうした教育方針は監視・懲罰の活用と同一の原理から発する。⁽²³⁾ 生徒の知性だけでなく、感性的ないし情念に訴えることを促して、『学事規範』にはコレージュにおける表彰の原則も周到に規定されている。

〈初等教学監視規範〉

【二八五】一般褒賞

然るべき時期に初等教学監視は生徒の表彰とこれに係わる報告ないし協議について指示を与える。本規範に付せられた配分基準を遵守し、競争試験の実施に先立ち各学級で公表することが必要である。

【二八六】個別褒賞

コレージュ校長は一般褒賞のほか個別褒賞の詳細を定め、各学級の教官はこれによって生徒の勉学意欲を鼓舞する。また、一定の行事において勝利を占めたり、それに相当する成果を挙げて称讃に値する場合もならかの表彰を行う。

〈褒賞の基準〉

【三一二】賞の数

修辭學級においては八個の賞が用意される。ラテン語散文に二個、ラテン語韻文に二個、ギリシア語散文に二個、ギリシア語韻文に二個である。人文學級および文法學級の最高學年については六個とし、ギリシア語散文を除く。修辭學級以前の段階では普通ギリシア語を教えないからである。他の初等學級には四個とし、ラテン語散文を除く。加えてキリスト教教義の暗誦に関する賞を各學級に一個または二個。ただし、ラテン語散文をつねに優先するよう配慮しつつ、生徒数の多寡に応じて賞の数を増しても減じてよい。

【三二三】課題作品の記述日

記述試験の月日に関しては、ラテン語散文に一日、ラテン語韻文に一日、ギリシア語散文に一日、ギリシア語に一日を割り当てる。

【三二四】課題作品の記述時間

課題作品の記述のため一定の日時を設定し、教室に生徒全員を集合させる。

【三一九】審査員

学職豊かで信頼の篤い人物三名を審査員とする。各地の慣習に応じて、うち一人は学外から迎えてもよい。記述した生徒の氏名は伏せられる。審査員は課題作品のすべてを読み、入念に検討する。ついで各種目の優勝者が多数決によって定められる。そのあと各種目の準優勝として一名ないし二名の生徒が選出される。

【三二二】表彰式

最後に一定の日を定め、可能なかぎり多くの列席者を招き、できるだけ盛大に優勝者を表彰する。優勝者は会衆の中央に出て、ひとりずつ厳かに賞を授けられる。然るべき理由によって生徒監および校長の許可を受けないかぎり、これに欠席した優勝者は受賞の資格を失う。⁽²⁴⁾

『学事規範』の指示によつてルイ・ルグランでは懲罰の処分が慎重に扱われるとともに、称讃と表彰が一層重視された。ジュヴァンシ神父によれば、賞罰の意義は隠れている資質を発見し、露わな欠陥を覆うところにある。生徒に自信を植えつけば、みずから短所を克服する力となるであらう。⁽²⁵⁾このような自負心と競争心の喚起が平素の授業においていかに行なわれたかを、まずデユボン＝フェリエの著作によつて把握したい。

学級はたんなる群れではなかった。それは嚴格に秩序づけられた階層であつた。各自の物理的位置は当人の精神的価値に照応するものであり、各自の座席が当人の成績を意味した。最高司令官から最下級の部隊の兵卒まで、いかなる生徒も恣意的に席を選ぶことはできない。公共の競技場で教官と学友を前にしてだれもが階段を登り、現在の地位を得たのである。獲得した賞杯が人目を惹くように据えられる。この賞杯を勝ち得たのは、たんなる個人の勝利ではない。ある陣営の他の陣営に対する勝利、ある学級の他の学級に対する勝利である。司令官も兵卒も冷淡な態度を取るはずがない。戦闘の開始によつて先陣は燃え立ち、大半が熱狂し、全員が目する。「王国の興亡に係るかのように」と一五九五年に記述されている。「生徒たちが激戦を交えるのは心地よい眺めである。」

とくに奨励されたのは大いに努力して記憶することである。ひとつの古典を美事に全巻暗誦できる生徒は、学友の模範として讃えられた。

しかし、考察、判断、趣味よりも記憶は低く評価された。よく書けた宿題は各学級の秀作集録に保存され、教室の壁や入口、さらには学園の休憩所に掲示される。七月二三日の優秀作品総展示会に出品されることもある。また、特別の作品は校庭や食堂で朗読され、全学級の模範として感嘆的となった。他方出来の悪い生徒を放置することは不当とみなされ、不注意や無知による重大な欠陥を持つ作品も、慎重な用意のもとに提示さ

れた。どの生徒も置き去りにしない方法である。競争試験のあとも各学級の優等生を記憶させる配慮がなされた。校内における学友の敬礼が勉勵と学識への讃辞となり、月桂樹で飾られた成績一覧が優等生への褒賞となつた。⁽²⁶⁾

ここではすべての学級が軍隊的な規律をもつて編成され、各人の学業成績がさまざまな仕方で明示されていた。しかし、イエスズ会のコレージュで一層注目すべき企画は、課題作品の評価や優勝者の表彰に学外者の参加を仰いだことである。競争と称讃をたえず織り込むイエスズ会の教育を、デュルケームは中世の大学やコレージュと対比させている。勉学を競う制度もなく、生徒を激励する表彰もない従来の学園に対して、『学事規範』に掲げられた訓練の方法は革命的な意義を持っていた。⁽²⁷⁾ なかでもルイ・ルグランで例年催される学園祭には他校の教官や報道関係者だけでなく、宮廷の貴顕や首都のブルジョワも招かれた。デュボン・フェリエが語るように、論述、詩作、絵画、演劇などの祭典をとおして生徒の名誉心は著しく鼓舞される。

競争心の力を倍加させ、生徒への訓練をさらに有効にするため、われらの学園は確かな方策を採用した。コレージュの教官だけでなく、宮廷や市井の人々が生徒たちを評価するのである。新聞もこれに加わって意見を述べる。その結果彼らは文芸コンクールや神学、哲学、数学の論文によって称讃を得ようと熱望した。学外者を眩惑するのではなく、玄人の関心を惹くよう望んだわけである。

一五九三年以前にそうした慣例が始まった。象徴、隠語、韻文、論文が毎月学外者の感嘆を受け、年一度の弁論試合にそれらが集積されて脚光を浴びる。

このような祭典の挿絵入りプログラムは数日前あるいは数週前に印刷されて、ラテン諸国に掲示される。各人は寸暇を惜しんで質疑や論議を用意し、戦いの日に備えて武器を磨く。日は来たり、鐘は響き、会場は飾ら

れる。近隣のコレージュの教官、教授、博士、高位聖職者、貴顕、貴婦人が着席する。そして、若き闘士が競技場に入る。

臨席する貴顕のなかにはしばしば法服貴族および帶剣貴族のエリートが含まれる。一六二五年にはルイ十三世の庶出の兄弟ふたり、一六六一年にルイ・モレ、一六四八年にアントワーヌ・ド・サタンヴィル、一六六三年にクレチアン・フランソワ・ド・ラモワニオンおよびS・ボル伯爵シャルル・パリ・ドルレアン、一六六八年にジャン・バチスト・コルベール・セニユレー、一六七九年にテュレンヌ公爵ルイ・ド・ラトゥール・ド・ヴェルニユ、一六八一年に宰相の子息ルヴァウ侯爵、一七三一年にシャルル・オーグスタン・ド・モーペウ、一七三八年にロレーヌ殿下・フォンタニューおよびブリエンヌ公爵。こうした家名に加えて若人の優美さと早熟の魅力を携え、十五歳に満たない者も含まれた。たとえば一六八一年八月八日には閣僚や國務評定官の子息、うら若い修道院長、可愛らしい伯爵の臨席に人々は注目した。また、ときには一六二五年のようにコレージュ卒業以前に牧杖を授けられた司教も来ていた。なお、一六八六年にはポーランドの貴族が、一七四二年にはスペインの大公も招かれた。この大公は十歳でS・ジャック騎士の称号を授けられて、ルイ・ルグラン校友の資格で護衛官の職務を兼ね、年金一萬ルーヴルを受けていた。(中略)

生徒への褒賞は豪華で得難いものであり、垂涎的となった。一六一八年およびルイ十四世の初期には二千ないし三千の生徒数に対して褒賞は三三個にすぎなかった。一七四四年から一七五〇年にかけては四八個の最優秀賞と六九個の準優勝賞が授けられる。修辭學級には褒賞二一個(うち最優秀賞六個)、第二學級と第三學級には褒賞九個(うち最優秀賞五個)、第四學級には褒賞七個(うち最優秀賞三個)、第五學級と第六學級には褒賞五個(うち最優秀賞二個)である。哲學級およびその他(高等學部)に褒賞はなかった。数学、フランス

語論文、歴史、地理にも優等賞は用意されない。歴史と地理に褒賞を設けることが一七一九年に提案されたが、実現に至らなかった。キリスト教の教義に関するものを除けば、基本的に褒賞の対象とされるのは、ラテン語作文（第四、第五、第六学級に対して四個）、ラテン語數衍褒賞（修辭学級）、さらにラテン語韻文およびギリシア語作文である。

修辭学級ではギリシア語韻文も考慮された。ラテン語翻訳への褒賞は一五九九年の『学事規範』には記されていないが、ルイ・ルグランでは十七世紀末葉に、ラ・フレーシユでは十八世紀以前に始められた。〔中略〕

ルイ・ルグランの表彰式はきわめてバリ風の行事であった。五千人の観客が列席し、そのなかにはバリやヴェルサイユのお歴々も含まれる。主要な受賞者が召され、榮譽の洗礼を注がれる。噂の女神を凌ぐ新聞が、

〔縉紳〕の住まう世界の隅々にこれを伝達してくれた。⁽²⁹⁾

ルイ・ルグランで表彰された数多くの秀才のなかでとくに傑出するのはフランソワ・マリー・アルエ、すなわらヴォルテールである。学生時代の彼についてはラセルヴィエール著『シャルル・ボレ神父』でも再三言及されているが、最新の研究成果を踏まえたルネ・ポモー著『アルエからヴォルテールへ』がとくに詳細である。一七〇四年に十歳で入学した彼は、人文学級に在籍する頃から頭角を現わすに至った。一七〇九年一月フランスは氷点下四〇度の大寒波に襲われ、未曾有の飢饉と悪疫が全土を襲った。この凄惨な冬に哲学者エルヴェシウスの祖父ジャン・アドリアンと父ジャン・クロード・アドリアンがパリ施療院で献身的な医療活動が続けたことは、すでに本稿〔その四〕で詳しく述べた。他方一七〇一年に始まったスペイン継承戦争が新たな展開を示し、劣勢に立ったフランスはフランドル地方の要地リールを占領される。ふたつの国難はルイ・ルグランの生徒にも深刻な影響を与え、ヴォルテールが社会と政治に関心を向ける契機ともなった。⁽²⁹⁾

同年五月疲弊したバリで守護神サント・ジュヌヴィエーヴの儀式が営まれ、数ヵ月後ルイ・ルグランの教官ルジェ神父はフランス復興の願いを籠めてラテン語頌歌を綴った。彼の作品を模倣してまもなく修辭學級の学生アルエが八音詩節のフランス語韻文を書く。この雄渾な詩でアルエは、天災と悪疫と戦争によって荒廃した祖国の荒廃を憂い、民族の再生のためサント・ジュヌヴィエーヴの加護を祈願している。⁽³⁰⁾ 若きヴォルテールに対する関するボモーの記述は、榮譽への願望を鼓舞するルイ・ルグランの教育がどのような成果を挙げたかを美事に語っている。

修辭學級においてアルエの詩的天才が輝きはじめた。この學級に彼が進んだとき、聲望高いふたりの教官がそこで教えていた。ルジェ神父とポレ神父である。どのように分担が決まったか判らないが、一七〇九—一七一〇年度は前者がラテン語弁論を、後者がラテン語韻文を担当していた。氣難しく粗雑なルジェにアルエは馴染まなかつたらしい。だが、ポレ神父には敬愛の念を抱いた。一六七六年生まれのポレは着任したばかりであつた。一七〇六年司祭に任ぜられ、ルーアンで二年を過したのち、ルイ・ルグランに配置されたわけである。いずれの教官のもとでもアルエの成績は傑出していた。学年末にはラテン語論文最優秀賞とラテン語韻文最優秀賞を同時に受け、類稀な榮譽を得た。褒賞として彼に授与された美麗本が十八世紀末葉に発見された。ダビラ著『フランスにおける内戦の歴史』である。(歴史に対する彼の強い関心を考慮して選定されたことは明らかである。)

ジャン・バチスト・ルソーがアルエを知つたのはこのときである。この詩人は追放を宣告された身でありながら、一七一〇年八月ルイ・ルグランにおける悲劇の公演に列席した。公演のあとに行われた表彰式でアルエという生徒の名が二度宣せられたことに、ルソーは注目した。タルトロン神父に尋ねると、「詩について驚嘆すべき天分を持つ小柄な少年」にほかならぬ。「貧相ではあるものの、明敏で鋭い眼をした十六歳か十七歳の

少年がそこで私に紹介され、きわめて愛想よくこちらに手を差し伸べた」と詩人ルソーは語る。〔中略〕

いまやアルエはひとつの公衆を、家庭的な範囲を超えた最初の公衆を意識した。称讃によつて若人の才能を喚起するという神父たちの教育方法に、それは合致していた。詩人アルエは自分の学級に讃美者を持った。かつての学友がそのように証言する。「名声を求めてあまりに燃えているとしても、コレージュが彼の渴望に極力点火したのだ」と聴罪司祭は嘆く。一七一〇年の表彰式におけるアルエの受賞には打ちやまぬ拍手が寄せられた。『歴史評論』によれば、傷病兵に関する彼の詩はヴェルサイユとパリで反響を呼び起した。コレージュと宮廷の關係を考えれば、この報道も嘘ではなからう。さらに神父たちはルイ・ルグランの門扉を超えて知れ渡るよう、アルエの『セント・ジュヌヴィエーヴに捧げる頌歌』を印刷したのである。⁽³¹⁾

(四)

サン＝ランベールの小伝『エルヴェシウスの生涯と作品』によれば、すでに本稿〔その八〕で引用したとおり、若き日の哲学者は教師の専制と学園での束縛に反抗した。しかし、称讃に敏感な彼はボレ神父の激励を受け、詩作や読書に格段の進歩を示したと言う。十九世紀なかばに公刊されたP・タミヨンによる列伝『十八世紀の哲学史に関する覚書』は、サン＝ランベールの証言にほとんど依拠しながら、エルヴェシウスとボレの師弟關係について一定の解釈を付加している。この哲学者の学生時代に係わる文献が僅少であるため、同書エルヴェシウス篇から関連部分を訳出した。

この文筆家〔エルヴェシウス〕の少年時代に特別のことは見出せない。父母のもとであらゆる心遣いを受け、ほかの躰け方、公的な生活の基礎となり、コレージュの原則でもある多少男性的で厳格な訓練に適應できなか

ったと思われる。したがって、父母や家庭教師ランベールの手を離れて教官のもとに移ったとき、また身内の愛情や配慮に代えて權威の支配を受け、当然ながらさして甘美でも寛大でもなく、あまり構ってもらえない指導に委ねられると、彼は苦痛を感じ、肉体的・精神的な無氣力に陥った。しかし、この少年が目覚める日が訪れた。老練な教師ボレのお陰である。慈愛深く有能なこの神父は激励と称讃によって、また一般的規範を柔軟に適用しつつ、彼を鈍化の状態や一途で止めどのない反抗から救い出した。刺激と激励を与え、学芸の愛好と成功への願望を鼓吹したのである。〔中略〕

早くから奔放であつたヴォルテールがボレ神父にどれほど敬意を抱いたかはよく知られている。しかし、それまで無視されていたり、いわば誤解されていた者が自分の生徒のなかにいた場合、神父はいかに無氣力で見捨てられていても、なんらかの活力が潜む子どもを美事に識別し、隠れていた幸福への萌芽を見出し、開花させたのである。すべてが発揮され、すべてが脚光を浴びるヴォルテールにはそんな必要はなかった。天成の炎の煌めきを見て、教官は軽率に激励するのではなく、むしろ冷静さと慎重さを求めたのである。それまで劣等な生徒であつたエルヴェシウスについては違ふ。ボレ神父は彼を見出し、世話をした。特別に育てるべき、放置されたひとつの魂としてである。活力を目覚めさせ、変化を招き寄せ、やがては文学的な志をも抱かせた。これがボレ神父の教え子、イエズス会士の教え子であるエルヴェシウスにはかならず。⁽³²⁾

クロード・アドリアン・エルヴェシウスの著作『精神論』はルイ・ルグランを卒業して二十年後に公刊され、功利主義の倫理と精神形成の理論がふたつの主要な論題となっている。なかでも第二の論題では個人の成長や民族の発展に関して独自の論理が展開され、競争心と名誉心の喚起について精彩を放つ叙述が繰り広げられる。ルイ・ルグランにおける勉学と訓練を綿密に考察した私たちは、イエズス会の教育方針とエルヴェシウスの論述がこうした側面で著

しい類似性を有することに気づく。

個人および民族の精神形成に関する理論は「精神論」の「第三篇 精神を自然の賜物とみなすべきか、それとも教育の所産とみなすべきか」全三十章で詳説されている。勿論エルヴェシウスの理論はカトリックの教義と根本的に異なり、コレージュ在学の末頃知り得たロックの経験論を基盤とする。「精神論」によれば、あらゆる精神活動は対象の知覚と記憶から始まり、注意の持続によつてたえず蓄積されていく。そうした認識の発展に係つて同書第三篇の「第四章 注意の不等等」ではつぎのように論じられている。

さまざまな文字を覚え、それらを連合し、綴りを作り、単語を構成するにはどれほど注意の持続を必要とするであらうか。異なつた性質を持つさまざまな事物、相互に偶発的な関連しか有しない事物、たとえば〈柏〉、〈大きさ〉、〈愛〉などのように視覚的な印象や感覚や情緒とそれらの単語の間になんら実在的な関係がない事物を、記憶のなかに結合するのはなおさらそうである。とはいへ、私たちはみな注意力の持続によつて、すなわち注意という行為の頻繁な反復によつて、国語を構成するすべての単語を美事に記憶している。したがつて、すべての人間に充分な能力および注意の持続が授けられ、高い理念の達成によつて傑出した人物となることが可能なのである。〔中略〕

注意という営みは人間本性と異質なものではない。注意の持続が困難と語るとき、人々は専念する労苦を、無為や短気から発する苦痛と混同している。欲望を欠いた人間がいらないように、注意を払えぬ人間も実際には存在しない。日常生活でも注意は不可欠である。注意が苦痛になるのは動機の如何による。義務や貧窮や恐怖である場合には、注意は苦痛である。快楽への期待であれば、注意自体が楽しいものとなる。同一の人物にふたつの異なる文書を解読させてみよう。ひとつは訴訟調書であり、他は愛人の手紙である。この場合調書を読

むのが辛く、手紙を読むのが楽しいことをだれが疑うか。〔中略〕

子どもを勉学に向かわせるのに、少年期には懲罰への恐怖だけで足りる。だが、同じ対処に適さない年長では、刻苦勉励するため強い情念、たとえば榮譽への願望に燃える必要がある。なぜなら、注意の強度は情念の強さに比例する。子どもたちを眺めてみよう。外国語を学ぶ場合に較べて、母国語を覚える場合に進歩の個人差がすくないのは、だれもが同じ程度の欲求に駆られるためである。すなわち、美味しいものが食べたかったり、遊びが好きであったりして、欲しいものと嫌いなものを見分けたいと願うにすぎない。こうして同程度の欲求からは同程度の成果がかならず生まれる。反対に外国語における進歩の如何は教師の技量や生徒への叱咤、さらにはわが子の学習に対する両親の熱意に依存する。きわめて多様に作用し、複合する幾多の要因から成るゆえに、そうした進歩に極端な不平等が認められることは当然である。⁽³³⁾

博識であるか無知であるか、有能であるか無能であるか、廉直であるか邪悪であるか。こうした精神の不平等は神の定めたものではなく、血統や体質など先天的な要因によるものでもない。倦まず注意を続けることによって膨大な量の観念が蓄積される、とエルヴェシウスは強調する。そうした注意の持続を促すのは、快楽を求め、苦痛を避ける人間の本性、(肉体的感性)にほかならぬ。食欲や性欲は(肉体的感性)と直接繋がっており、さらにそこから所有欲、金銭欲、権力欲などの情念が派生する。祖国への愛や榮譽への願望はもつとも昇華した情念と考えられる。これらの情念に鼓吹されてさまざまな人物が刻苦勉励した事例を『精神論』第三篇の「第五章 情念の力」によって確認しよう。

精神の世界における情念の役割は、自然の世界における運動の役割に等しい。情念は万物を創造し、破壊し、保存し、鼓舞する。情念が消えれば、万物が死滅する。精神の世界を活気づけるのも情念にほかならぬ。商船

に蒼茫たる大洋を渡らせるのは貪欲という情念である。沼沢を埋させ、山塊を均させ、隧道を穿たせ、メンフィスのピラミッドを建設させ、モリエスの人造湖を掘らせ、ロドスの巨像を建立させるのも自負心という情念である。〔中略〕

高貴な自負心や祖国愛や名誉心は公民に勇氣ある行為を決意させるが、学問や芸術において傑出しようと願う人たちにも粘りと強さを与える。キケロはこうした人たちを「静かな英雄」と呼んだ。このような名誉への願望に燃えてこそ、天文学者はコルドリエの氷山で雪と霧にも怯むことなく観測を続け、植物学者は草木を採集するため断崖を這い登り、学問好きの青年はエジプト、エチオピア、インドにまで赴き、当地のもっとも著名な哲学者と会見し、彼らの教説の原理を聴取する。

このような情念がどれほど強くデモステネスを鼓舞激励したことか。みずからの音声を直すため彼は毎日海浜に立ち、小石を口に含みながら荒波を相手に演説した。また、ピタゴラス派の学徒が熟慮と瞑想の習慣を身につけるため三年間の黙座を続け、俗事を避けたデモクリトスが精妙で究め難い真理を探究するため墓場に籠もったのも、名誉への願望からである。⁽³⁴⁾

所有欲や金銭欲が敏腕な商人や大胆な開拓者を出現させるだけでなく、自負心や名誉心が傑出した学者、芸術家、軍人、事業家を造り出す。こうした精神形成の道程は個人の次元に止まるのではない。エルヴェシウスがとくに祈願するのは、民族の次元における精神の発展である。多くの啓蒙思想家と同じく彼も古代ギリシアを理想化しながら、名誉への願望を尊重する民族が繁栄し、発展することを力説する。つぎの引用するのは『精神論』第三篇の「第三三章　さまざまな学問・芸術における北方民族の優位」に含まれる結論的な叙述である。

ギリシアの自然環境はつねに同一である。なぜ今日ギリシア人が往古のギリシア人と異なるのか、政治形態

が変化したからである。容器に従つて水がどのようなにも変形するのに似て、民族の性格もあらゆる形状に変わる。いかなる国においても政治の精髓が民族の精髓を形成する。共和国でギリシアほど名将や盟主や英雄を輩出したところがあるうか。政治家についてはさて置き、哲学を尊重する国がどんな哲学者を産出するであろうか。ギリシアを征服したフィリッポス王はアリストテレスにつぎのように書いた。「余が神に感謝するのはわが子を賜つたことではない。そなたの存命中に生まれたことを感謝する。わが子の教育をそなたに託したい。余とそなたの誇りとなるよう育ててほしい。」世界の覇者アレクサンドロスもキュロス大王の廃墟からこの哲学者に一層鄭重な書簡を送つた。「いよいよ先生が至上の論文を公にされると知りました。いまや余はなによりもつて他者を凌駕できるでしょうか。そなたに教えられた高遠な学問が共通のものとなるのです。強大な権力よりもむしろ崇高な事象の認識によつて余は人々に優越したいと思います。敬具。」〔中略〕

若干の文筆家は好んでスパルタ人を徳義に秀でた民族、知的というよりも質朴な民族と描いているが、彼らもほかのギリシア人と同じく芸術や学問の魅力に敏感であつた。詩歌を愛してスパルタ人はアルキロス・クセノダメウス、ポリムヌステス、サカドス、ペリクリテス、フリニス、ティモテネスを自国に招請した。また、テルバンドロスやスペンドンやアルクマンの詩を讀める一方、すべての奴隷に歌うことを禁止した。彼らによれば、奴隷が神聖なものを汚すからである。韻文で想念を表現する技術に劣らず、弁論の技術でも彼らは有能であつた。「一介のスパルタ人と会話する者は」とプラトンは述べる。「最初は粗野な男だと感じる。しかし、本題に入るや、同じ人間が気高さと的確さと緻密さをもつて語り、彼の言辞が精彩を放つ。その傍らではほかのギリシア人は片語しか発せぬ稚児に映ずる。」高雅で、醇乎たる談話ができるよう、スパルタ人は少年期から教えられる。思想の真实性に表現の優雅さと繊細さを結合するよう、またつねに簡潔で適切な応答に機知と

情感を織り込むよう指導されるわけである。慌てたり、ぼんやりして応答が悪い者やできない者は即座に咎で罰せられた。悪い行為と同じように、下手な弁論がそこでは処罰を受けた。また、何事もこの民族の理性を乱さなかった。スパルタ人は揺籃のときから我侪や氣紛れを許さず、青年期には一切の恐怖を乗り越える。彼らは山奥や暗闇で毅然として歩む。ギリシア諸民族のなかでスパルタ人はもつとも迷信に惑わされず、己れの宗教として理性の法廷を挙げた。⁽³⁵⁾

古代のアテネやスパルタを範として榮譽への願望を尊重させるには、優れた教育と正しい政治が必要である。『學事規範』においては絶対王政のエリートと行動的なイエズス会の養成をめざし、競争心の喚起と盛大な表彰が重視された。他方『精神論』では民族を繁榮させる芸術家や政治家の育成をめざし、名譽心の覺醒と褒賞制度の確立が提唱される。根本的な立場の相違にもかかわらず、エルヴェシウスの主張が少なくとも現象的にルイ・ルグランの教育方針と類似性を有することは否定できない。ただし、学園の厳しい規律に反抗的であつた彼は、子どもへの監視や懲罰を奨励するような文言は『精神論』でもほとんど述べていない。

情念の誘導と能力の開発についての叙述は『精神論』第三篇の全章に盛り込まれているが、さまざまな形態における精神活動を検討した第四篇でさらに新しい展開を示す。すなわち、全巻を締め括るの二つの章でエルヴェシウスは勉学の対象と教育の改革について一層具体的な提言を試みる。情念の誘導と勉学の対象にとりわけ係わるのは、「第十六章 自己にもつとも適した勉学の分野を発見する方法」である。

自己に適した勉学の分野を定めるには、脳裡に蓄えた事象の数量と種類を確認し、さらに榮譽への願望にどれほど燃えているかを判断するがよい。この問題で人々は見誤り易く、たんなる趣味を安易に情念に呼ぶ。だが、すでに述べたとおり、両者を区別するのはきわめて簡単である。ひとつの情念に動かされ、一切の想念と

行動がそれに従属する場合のみ、情熱に燃えると言える。魂のなかで同じ程度の欲望が数多く分散すれば、趣味しか育たない。欲望が多いほど、趣味は平凡なものとなる。反対に欲望が僅少であつて、單一化に近づくほど、趣味は強烈となつて情熱に変化する。したがつて、情熱の証しとなるのは、このような單一化、すくなくともひとつの欲望の絶対的な優位である。情熱の有無を確かめたのちその程度を知るため、偉大な人物となる熱情をどれほど有するか検討しよう。栄誉への願望を正確に測定できるのは、少年期である。この時期には情熱を抱くことが比較的容易であり、喜んで熱情に身を委ねる。また、資質や才能を害する動因をほとんど知らない。尊敬される人物を觀て、将来自分も尊敬されることを祈願できる。大人は違ふ。平々凡々と年輪を増した者は、無為の己れを慰めるため、才能ある人材をあからさまに輕蔑する。美点を評価するには、利害を超えて判定すること、したがつて嫉妬心に驅られないことが必要である。少年期には嫉妬心が微弱である。少年は後世の人々とほとんど同じような眼で偉大な人物を仰ぐ。⁽³⁶⁾

この章でとりわけ注目されるのは、凡庸な子どもの能力開発と少年期からの専門教育である。月並みな情熱しか持たない人間に向かつてエルヴェシウスは、早くから未開拓の分野をめざして勉強するよう勧めている。こうした提言を読んで想起されるのは、ルイ・ルグランにおける彼自身のかつての姿である。学園での訓練に適應できず、肉体的・精神的に無氣力であつたとみなすダミヤンの解釈はやや極端としても、少年エルヴェシウスが傑出した俊秀でなかつたことは確かである。いかにすれば凡庸な人間が優れた精神に大成できるかは、教官ボレにとつても彼自身にとつても切実な問題であつた。そうした体験の反映を『精神論』の論述のなかに読み取することは、牽強附会にはならないであらう。⁽³⁷⁾

偉大な人物に対する尊敬の如何によつて各人における情熱の強弱を測定し、ひいては勉強の分野を選定でき

る。いかなる分野であろうと、成功の難易に情熱の強弱を対応させれば、適切な選択となる。数多の人材が集まり、完成度の高い分野ほど、成功するのは困難である。コルネイユ、ラシーヌ、ヴォルテール、クレヴィオンが光輝を放つ分野に新入りするほど無謀な業があるうか。そこで傑出するには超人的な刻苦勉強をなしうること、したがって榮譽に対する烈々たる願望に燃えることが必要である。灼熱した情熱を有しない人はそうしたライヴァルと競つてはならず、より容易に成功できる分野に入るべきである。その種の分野も存在する。たとえば物理学には未開拓の領域が存在する。偉大な天才が一層興味ある事象に専念し、いわば瞥見しただけの課題もそこには横たわる。こうした類いのところでは発見や成功がほとんどすべての人間に可能である。榮譽への願望に鼓舞されない人は、人影の稀な小道で成功を目指し、英明な人材が行き交う大道をとくに避けるがよい。偉大な人物と比較されれば、ささやかな美点は色褪せて見え、かれらに追従する公衆は然るべき敬意も払わない。⁽³⁸⁾

もとよりエルヴェシウスの提言は個人的な体験の反映に止まらず、万人に祖国や社会への貢献を呼びかけるものであった。古代ギリシアを思い浮かべ、傑出した学者・芸術家の輩出を祈りながら、その眼はフランスの現実と未来を見据えていた。祖国の繁栄も国民の福祉も学問の進歩や政治の改革なしには実現できない。そして、未開拓の領域と未解決の課題に充ちた学問、たとえば物理学や政治学こそ、強烈な情熱や非凡な才能に恵まれた人々だけでなく、凡庸とされる人々、すなわち民衆の大半にも到達可能なのである。

月並みな情念の持主が名声を得るか否かは、榮譽への願望に燃え、超人的な刻苦勉強を続ける人々との競合を巧みに避けることに依存する。灼熱した情熱に燃えてはいないが、少年期から勉学と省察の習慣を身につけた人は、ささやかな精神的努力によってときにはかなり高い名声を獲得できる。したがって、自己の精神を最

大限に活かすため肝に銘ずべき事項は、目標とする學問に必要な情熱の度合と己れを動かす情熱の度合を比較対照することである。こうした観点から自己を正しく見つめる人は、才能ある人物をもしばしば悩ます千余の誤謬を免れる。たとえば、情熱の火が衰える年齢では、新しい學問に踏み込んで戸惑いすることは明らかである。學問や芸術のさまざまな分野を渡り歩く者は、器用貧乏になるだけである。これこそ虚栄心が誘う暗礁であつて、俊敏な人物もしばしば乗り上げる。なおまた、學問や芸術の根本原理を学ぶため、倦まず注意を持続できるのも少年期である。この重要な真理を忘れると、天才も前に進めず、學問の進歩は止まる。本書の第三篇で論証したことを想起してほしい。肉体的な快樂への欲求が私たちの心に榮譽への願望を燃え立たせる。こうした欲求を少年期ほど強烈に感じるときはない。したがつて、榮譽への烈々たる願望を抱けるのも、人生の春においてである。〔中略〕

個別的な利益に関する論議に没頭する大抵の行政者が、將來の榮達に備えて密かに深遠な學問を修めないかぎり、どうして要職を立派に遂行できよう。そうした學問を等閑にする人物は、高い地位を汚すだけである。頑迷で專制的な人物であるとしよう。彼によつて推進される政策は、苛酷かつ愚劣なもので、つねに公益を損なう。公益を尊重する穏和な性格の人物であればどうか。彼はなにごとにも敢えて画策しない。いかにすれば行政になんらかの変革を試みうるか。前人未踏の道や断崖の続く道で人々は確かな一歩も踏み出せない。精神の強固さと剛毅さはかならずその度量に依存する。企画を実現する多くの方策を持つ人物は、構想の作成においても大胆である。反対に方策に乏しい人物はかならず優柔不斷であつて、愚者にはこれがしばしば思慮深いように映ずる。政治という機械を頻繁に弄るのはきわめて危険であるが、一定の時点に來ると、新たな部品に換えないと止まつてしまう。無知な職人は直そうとせず、機械は動かないままである。有能な職人は違ふ。彼は

手際よく調整し、機械を作動させる。しかし、大胆な賢者には政治科学という深遠な学問が前提とされる。これこそ倦まぬ勉学を必要として少年期にのみ可能であり、またおそらく公衆の称賛によって多大の恩典が授けられる国々においてのみ可能である。このような称賛が恩典と結びつかぬところでは、偉大な才能を増すことはできない。優れた教育や環境の特異な連鎖によつて少数の傑出した人物が現れたとしても、公衆の称賛を望む彼らはそうした祖国を見棄ててしまふ。こうした自発的な脱出こそ滅亡の前兆である。住み慣れた梢から飛び去る鶯が、柏の老樹に迫る最期を予告するように。⁽³⁸⁾

〈註〉

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。(原則として大文字は著者の頭文字を、小文字は署名の頭文字を表わす。)

甲 哲学者エルヴェシウスの著作

Hel : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.

Helm : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, texte revue par Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1988.

Hol : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes. (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1967.)

乙 その他の主要な文献

Dcl : Gustave DUPONT-FERRIER, *Du Collège de Clermont au Lycée Louis le Grand (1568-1920), la vie quotidienne d'un collège pendant plus de trois cent cinquante ans*, Paris, De Boccard, 1921. tome I.

Drs : *Ratio studiorum, plan raisonnée et institution des études dans la Compagnie de Jesus, édition bilingue latin-français*, présentée par Adrien Demoustier, Paris, Belin, 1997.

Elie : G. EMOND, *Histoire du Collège de Louis-Le-Grand, ancien Collège des Jésuites à Paris depuis sa fondation jusqu'en 1830*, Paris, Durand, 1845.

Se : Jean François de SAINT-LAMBERT, *Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius*, dans *Hol*, tome I, pp.1-176.

Sp : J. de la SERVIÈRE, *Père Charles Porté S. J., un professeur d'Ancien régime*, Paris, Oudin, 1899.

- (1) Drs, p.90.
- (2) Del, p.231.
- (3) Del, p.232.
- (4) Del, pp.232-233.
- (5) Del, p.233.
- (6) Del, pp.233-235.
- (7) Del, p.236.
- (8) Del, p.236.
- (9) Del, pp.237-238.
- (10) Sp, pp.117-119.
- (11) Del, p.238.
- (12) Sp, p.239.
- (13) Sp, pp.119-120.
- (14) Del, p.253.
- (15) Drs, pp.133,144.
- (16) デュルケーム著、小関藤一郎訳『フランス教育思想史』、普遍社、一九六六年。下巻、一六八一―一七〇頁。

「今まで、われわれはジェスイットの教育の内容しか研究してこなかった。そこでつぎにその訓練の体系を考察しなければならぬ。この面において彼等はいくつもの多くの技法と獨創性を發揮したが、その点における彼等の成功をもっともよく説明してくれるのである。」

彼等の訓練はすべてふたつの原理に基づいていた。

第一の原理は、生徒と教育者の間に、同時に連続的で人格的な接触なしには、立派な教育は不可能であるということである。

しかもそれは二重の目的においてである。まず第一に、生徒は決して彼自身だけに放任してはならないのである。生徒の形成のためには、時時の消長や減退に陥ることのないような影響力の下に生徒を置くことが必要なのである。なぜなら、悪の精神はいつもすきをうかがっているからである。

こうした理由によって、ジェスイットの生徒は決してひとりにされることはなかった。「教会でも、学校でも、食堂でも、娯楽のときでも、監視者はいつも生徒を注視していた。街上でも、寮の部屋にでも監視物の眼はいつも離れず、すべてを注意していた。」しかし、この監視はたんに逸脱的行為を阻止することを目的としたものだけでなく、ジェスイットをして心ゆくまま「生徒たちの性格や慣習を研究し、各人に対して適当な指導の仕方を見出すのに役たしめる。」ためでもあった。(同書、下巻、一六八一―一六九頁。)

(17) Del, pp.254-255.

(18) Gabriel COMPAYRE, *Histoire critique des doctrines de l'éducation en France depuis le seizième siècle*, Paris, Hachette, 1898, tome I, pp.173-176.

「イエズス会士によって運営される教育機関の成功は、彼らが節度ある訓練を確立したことになかば起因する。パリ大学の放任された乱雑さと多くの学校の極端な厳格さ、モンテーニュの言葉によれば、『少年を閉じ籠める牢獄』との中庸を中世には見出しえなかった。(中略)」

懲罰の処分において慎重で冷静な態度を保持し、生徒を卑屈にする叱責よりも生徒を力づける激励を多用したイエズス会士は、自由な教育から矯正手段の濫用を排除すべき真の異議を把握していたと考えてよいであろうか。然りである。なおまた、ほかの思惑によつても神父たちは節度ある態度を続けた。イエズス会士が生徒のうちに彼らが認識したのは、早期から尊厳を護るべき生きもの、おとなであるかのように扱って、おとなに成長させていく生きものだけでなく、慎重に育てるべき家柄の息子や若い緋紳、数年後には富や権力を手中にして恩顧や德行によりイエズス会に貢献できる人たちであった。」(Ibid., pp.173-174.)

(19) Del, pp.256-257.

(20) 多くの学園史と同じくエモンの著作もコレージュの起源、施設、管理体制、教官組織について詳しく述べているが、生徒自身の勉学や生活に関しては論述がきわめて手薄に感じられる。ただし、ルイ・ルグランにおける地下牢の有無をめぐる左記のような説明がなされている。

「ダリュウールは自著『バリの歴史』のなかで以下のとおり述べている。イエズス会士の追放のあと棍棒と松明を携えた生

徒たちが、医務室の穴倉に入った。その一隅で彼らは足下の地面が響くのに気づき、羽目板の下にある美しい階段を発見した。それを降りると、穹窿をもつ広い広間があった。広間の周囲にはやはり穹窿をもつ穴倉が十室ばかりあった。その各々は七メートルから八メートルほどの間口で剛い鉄輪を備えていた。広間の穹窿を中央の石柱が支え、石柱の四面にも鉄輪があった。穹窿には狭い入口があり、鉄格子によつて封鎖されている。入口はただひとつしか見出せなかったが、ここから不幸な犠牲者の食べ物を降ろしていたことは明白である。これこそ合法的で宗教的な禁錮に供した往時の地下牢にほかならぬ。

私もこの穴倉を視察したが、ダリユールが語る地下牢をまったく見出せなかった。人々はイエスズ会士の野心や狂信を非難したが、体刑執行の本部を造ったとは述べていない。付言すれば、コレージュでは人目が行き渡り、秘密の場所には適しな

こと」(Ehe, pp. 364-365.)

(21) Del, pp. 258-259.

(22) Louis Rouvroy SAINT-SIMON, *Mémoires*, éd. Y. Coirault, Paris, Gallimard, 1985, tome IV, pp. 40-41.

事件に連座した兄弟のひとり、ルネ・ルイ・ダルジャンソンは警察長官や法務大臣を歴任したあと、著名な『回想および日誌』全八巻を執筆した。この記録によれば、悲哀に沈んだブッフレは元帥から退学を促され、数カ月のち天然痘に罹つて死んだ。なお、これら三人の罪過はル・ジェ神父めがけて豆鉄砲を放ったことと言われる。(Notes et variantes, dans *ibid.*, p. 1073)

(23) Del, pp. 240.

(24) Drs, pp. 143-144, 149-151.

(25) Del, p. 240.

(26) Del, pp. 241-242.

(27) デュルケーム著、小関藤一郎訳『フランス教育思想史』、普遍社、一九六六年。下巻、一七一―一七五頁。

「トランベットの楽音に合わせて年次賞状授与式が厳粛に行われたのはもちろんのこと、この外にも学年のちゅうでも美事な朗読、すぐれた文学作品、立派なダンス演技などに対してその都度随時に賞が授与された。第二学級以後(中等教育第五年目)になると、学級ごとにアカデミーが設けられ、優秀な生徒だけがそこに所属していた。またもつとも輝かしい成績をあげた生徒が発表し、家族も出席し、それを聞き拍手を送る公開の集会も催された。このようにして無限に豊富な奨励方法とられ、生徒の自尊心はためにたえず過敏状態におかれていた。

この点において、なおまた、ジェスイットは従前のやり方に対して革命をおこしていた。実際、われわれは、中世の大学もコレージュも競争制度を全く知らなかったことを見てきた。中世には功績に報い、努力を奨励する賞は何もなかった。試験の

仕方でも平凡であったから、非常に勤勉な学生にとってはそれは一種の形式でしかなかった。ところが、今や唐突に、全く異った制度がつくられたばかりでなく、一挙に多血症的發展をとげたのである。

われわれは、榮譽に対する愛着、称賛に対する趣向、名譽感が、ラブレールにとっても、エラスムスによっても、一六世紀の偉大な思想家たちにとっても同様に、全知的活動の、したがって、学校活動の、本質的な原動力であったことを見たのである。

それ故、この二つの点において、ジェスイットは、少なくとも原理上では、時代精神と台致していたのである。」(同書、下巻、一七三—一七五頁。)

(28) *Dcl. tome I*, pp. 245-246, 251-252.

(29) René POMEAU, *D'Arnaud à Voltaire, Voltaire en son temps I*, Oxford, Voltaire Foundation, 1985, pp. 45-46.

(30) *Ibid.*, p. 46.

(31) *Ibid.*, pp. 46-48.

(32) Ph. DAMION, *Mémoires pour servir à l'histoire de la philosophie au XVIII^e siècle*, Genève, Slatkine Reprints, 1967, tome I, 359-361.

(33) *He I*, pp. 284, 288-289, *HeM*, pp. 257, 260-261, *Hol*, tome III, pp. 234-237, 244-246.

(34) *He I*, pp. 297, 301-302, *HeM*, pp. 268, 271-272, *Hol*, tome III, pp. 263-264, 272-275.

(35) *He I*, pp. 463-467, *HeM*, pp. 409-412, *Hol*, tome V, pp. 69-79.

(36) *He I*, pp. 623-624, *HeM*, pp. 546-547, *Hol*, tome VI, pp. 164-166.

(37) 社会思想史の観点からエルヴェシウスの著作を精細に検討した森村敏己は「名譽という快楽を重視した」理論には「彼の個人的な氣質も影響している」と述べる。

「コンドルセ」が「精神論」は常に他人より優位に立つとするエルヴェシウスの自画像だとしていたことも、ここで思い出しておこう。エルヴェシウスはきわめて名声欲の強い人物であり、とりわけ三人の著名人が彼の欲望を刺激した。まず、エルヴェシウスはモベルチュイが、その名声ゆえに女性たちに取り囲まれているのを見て、数学を志した。次にはヴォルテールに憧れ、詩人を夢みたが、いずれも失敗した。最後にはモンテスキューの『法の精神』に刺激され、『精神論』の執筆を思い立ったのである。「中略」伝記というよりも賛辞を連ねた観のあるサン・ラベールのエルヴェシウス伝にも、似たようなエピソードが登場する。コレージュ時代のエルヴェシウスは、はじめは凡庸な生徒だったが、称賛にきわめて敏感なことに気づいた教師が、絶えず褒めながら指導したところ、急速に才能を発揮したというのである。」(森村敏己著『名譽と快楽—エ

ルヴェシウスの功利主義』法政大学出版局、一九九三年。九八―九九頁。）

(38) *He1*, pp.624-625. *HeM*, pp.547-548. *Hol*, tome VI, pp.167-169.

(39) *He1*, pp.627-628. *HeM*, pp.548-550. *Hol*, tome VI, pp.169-176.